

フコイ ウイルスに身 せりや甲か びんびんまの

一糸から先どのようか 布タツコ 行キ まよか内い

### おろか者

賀屋 宏昌

現役の頃よく一緒に飲んでいた高校の同期生が、わが家に訪ねて来た。

友は「わしは最近一回ほど海に飛び込んだ」といふ。「ほう！この寒いのには寒中水泳か」と聞いたたら、「そうじゃあない」といふ。魚を釣りに行くと思つて港につないでいる舟に乗ろうとしたら、一びくらしい間隔が開いているので舟までひよい！と飛んだ。「飛んだと思つたら、飛んでおらんかったのいの。寒かったちゆうもんじゃあない。大風邪をひいたでよう

## 読者のひろば

「そんな四方山話の果てにこんなことを言い出した。」「お前、わりあい立派に生きていると思うが、今から先のことをいろいろ考えると、心配になることはないかの」

「いいや、わしは何も心配はないが、金がないのが玉に傷だ。少し貸してくれるか」

「そりゃあ、わしもない。こつちが貸してもらいたいくらいじゃ」

「でも、昔は楽しいことがいっぱいあったが、だんだんと足腰は悪くなるし、これから先、病気になるんかと心配になることがあるが、お前はどうかの」

「わしは何も心配はないで…」

「そうか、お前、少し馬鹿になつたんかのお」  
「わしは昔から馬鹿よ。親鸞聖人は自らのおんことを愚禿(ぐとく)親鸞と言つておられる。だから、わしも馬鹿に決まつておる」

「ほうーそれでもこの先、死が待っている。死んだ先はどうなるかとか、材木が倒れるように倒れたら、後は何もなくなるのか、そこが心配じゃろうが…」

「わしは往く先が決まつている。仏の国に往くんのだ」

「それが、どうして分かるんか」

「分かるも分からんもない。親鸞聖人は必ず待つていると仰せられている」

「それじゃあ、お前は何も心配はないと言つのか」

「何も心配していない」

「いやあ！お前はええのお。しかし、往つた先に何もなかつたらどうなる」

「それはその時のことだ。だまされても、後悔はさらさらない」

「いやあ！お前には参つた参つた」と言つて友は帰つた。

手土産に新鮮な鳥賊(いか)を置いて帰つたので刺身にして食べたたら、これが何と旨い。鳥賊がこんなに旨いとは知らなかつた。

翌日電話をかけ、「きのうは鳥賊をありがどう。これほど鳥賊が旨いとは知らなかつた」と礼を言つた。

「そうか、それじゃあ、またとれたら持つて行くけえのお」

「それじゃあ、二気ぞね」と電話を切つた。

その後、音信は途絶えていた。しばらくしてその友が亡くなつたという。

あれだけ多くの人に愛された人はいないが、葬儀に

日刊いわくには読者の皆さまの投稿を待っています。あて先は〒740-0012 岩国市元町3-6-23 電話0827(30)1892 FAX(30)1100

は死を惜しむ沢山の知名士が詰めかけ、盛大な葬儀であつた。  
「いやあ！永い間の交誼をありがどう…」  
ちなみに、椅子から立ち上がつて勢いづばいに飛び上がった。いくら飛んでも一疋も足は床から離れなかつた。これじゃあ海に落ちるなあ…  
ご冥福を祈ります。合掌